

駅が、まちのあたらしい始まりになる

常陸多賀駅周辺地区は、街道を中心に、産業や鉄道とともに発展した歴史の先へ向け、転機を待っています。ここでは次の世代への幕開けとして、駅と周辺地区一帯を「**まちのあたらしい広場**」として捉え直し、あたらしい駅=あたらしい広場から街を転換させることを目指します。駅を変えることを街が変わる機会に結びつけ、魅力ある賑わい空間と良好な都市景観形成を目指します。

1.広場のなかの駅(1ア)

・これまでの「線路の東西に駅と広場がそれぞれある」という機能的な風景を乗り越え、「**楽しげな広場がまず先にあってそこへ電車がやってくる**」という場面を想定します。駅=電車に乗るための場所だけでなく、駅を中心とした周辺一帯を「**あたらしい広場**」として新たに設え、そこに駅を位置づけます。特定の用事がなくても日常的に人が集まり、にぎわいが生まれる空間や雰囲気を醸成します。駅のあり方/駅周辺のあり方、内部/外部空間について、双方を一体で考えることで、多くの人が行き交う駅のポテンシャルを活かし、**駅を交流拠点へ変えていきます**。

2.まちの裏を表に変える(1イ)

・日本の多くの駅では周辺に商業施設や高層マンションが乱立し、人口は集まっても交流は生まれません。駅自体もコンコースと商業施設が空間として分離し、通路を主体とした空間形状が移動機能ばかりを想起させます。そこで、**駅を滞留や交流を想像させる、広々とした空間イメージへ変えます**。出来る限り幅広の橋上駅を計画し、ここへ①駅舎、②自由通路空間、③駅西口市施設、④その他にぎわい創出空間施設を集約し、内部を**屋内広場**とします。諸機能を集約することで駅周囲に空地が得られ、空地一帯をそのまま**屋外広場**として整えます。駅の内部も、外の広場も広々とする事で内外の経験が繋がります。・駅周辺一帯を広場として一つにまとめることで、駅に背を向けて建っていた線路脇の建物の環境が向上し、蘇ります。屋外広場に顔を向けて建てる(または改修する)ことにより、これまで街の裏側となっていた線路脇の低未利用地が活性化し、街の表側へと逆転させます(→III-1.)。「**まちのあたらしい広場**」から街が再び潤い、駅の姿とともに市民の誇り(シビックプライドや地域ブランド)にします。

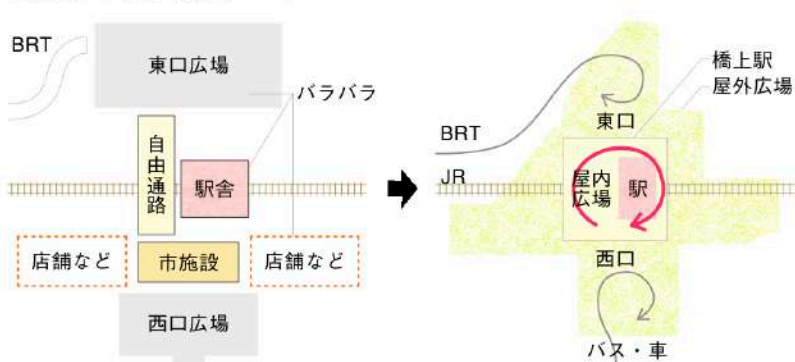
3.まちの公共広場としての駅(1ウ)

・橋上駅内部は大きなワンルームの空間とし、**見通しを保ちながら諸施設を散りばめて配置**します。**回遊動線**(ラウンドアバウト)を駅内に取り込み、散策しながら海側、山側、線路側へ抜けた**眺め**を得て、自然環境や線路の先の風景を想像しながら過ごせる**屋内広場**です。幅の広い駅舎は、朝夕の通勤通学時に多くの人の流れを捌き、他の時間帯はゆったりとした広場になる、というように**実用性**があります。夜は**明るい照明**とし、安全で安心できるスペースとします。

・橋上駅が幅広であることによって、東西の**人の流れをダイレクトにつなげます**。西口(北西)から見上げると、背の高い軒天井には東口(東南)から降り注ぐ光が反射します。太陽と海の気配のする**明るい軒**が東南の空へ延び、西口から橋上の**屋内広場**と東口へ導きます。駅内部は**光に満たされる**よう、大きな開口部、明るい色調と光沢のある素材で構成します。幅広の間口は**自然光と海風**を採り入れ、日立の自然環境と一つになります。



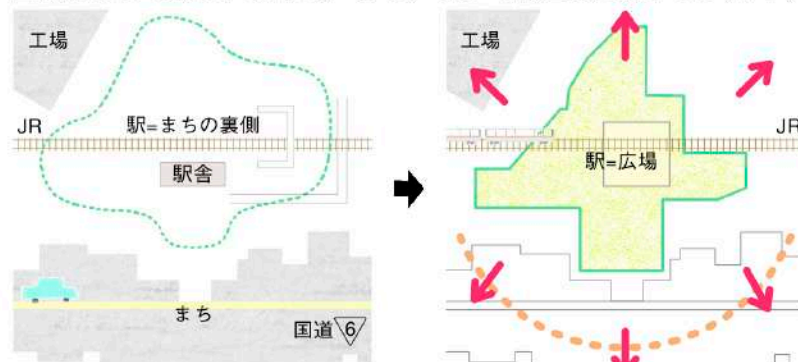
■広場のなかの駅(1ア)



<これまでの駅>
・駅や周辺の要素がバラバラに並置され
目的を消ませるだけの機械のような駅

<これからの駅>
・屋内広場と屋外広場の二つに整理し、
一体の環境・雰囲気をつくる

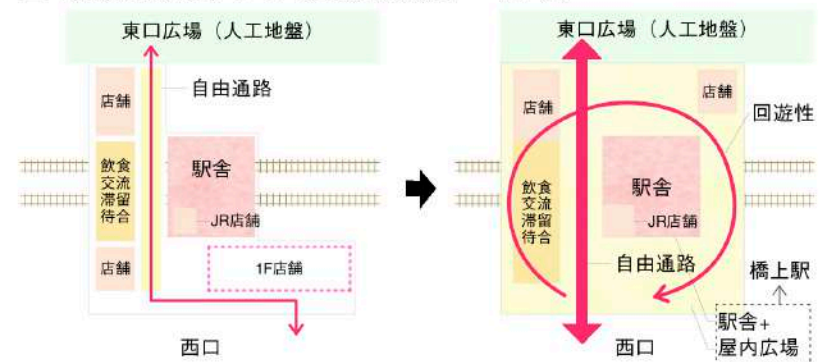
■駅がまちの新しい始まりになる。まちの構造を逆転させる(1イ)



<現状>
・街道(車)を中心に発達したまち
・人もまちも世代交代の時期を迎えた

<展望>
・駅(広場)を中心としたまちへ変える
・賑わいを駅からまちへ再び拡げる

■「通路的な駅」から「広場的な駅」へ(1ウ)



<素案>
・自由通路を中心とした計画
・各要素がバラバラに並び交流が少ない

<提案>
・駅を広場化し回遊性をもたせる
・周辺の活動をダイレクトにつなげる



空が開けた東側。水平方向に視線が抜けた内部空間

山々を望み、まちを見おろす西側

1.街のラウンジ(IIア)

・駅周辺の空洞化と市街地の郊外化が進み、自動車(高齢化の危険)や大店舗(閉鎖の恐れ)と依存しがちな生活空間を見直す必要を感じます。信頼度の高い幹線鉄道駅を日常的に滞在できる公共空間とし、まず駅に人を集めることが駅周辺や街の賑わいにつながる、と考えます。いま必要な情報とは、スマートフォンでどこからでもアクセスできる情報よりも、他人の生気や表情です。人がたくさん集まって、顔を寄せ気軽に声を掛けやすい環境づくりこそ、未来の情報拠点の姿です。高齢者や学生や工場で働く単身者、子育て家族など、郊外の都市風景で孤独に陥りがちな日常生活を支える環境となります。そこで、橋上駅内には、市施設としてラウンジスペースを提案します。学生や生徒が勉強をしたり、近隣住民が駅周辺で買ったランチを食べに集まったり、語り合ったり、自由に弾けるピアノがあり、子どもや大人が同じ雰囲気なかでくつろげるものです。駅をプレイスメイキングの対象とすることで、乗換や待合といった電車の経験も日常生活の豊かなひと時の一部につなげ、電車とともにある生活を豊かにします。

2.駅一帯を立体広場にする(IIイ)

・橋上駅が幅広であるもう一つの重要な意図は、新造される東口の人工地盤や高架道路、JR線路といったスケールの大きな土木構造物との大きさの調和です。大らかなスケールの屋内広場的な駅と、駅周辺の外部空間とが一体の立体広場となって、高低差のある東西市街地をつなげます。駅周囲に生まれた複数の空地は、市街地との緩衝帯として、屋外広場に設えます。橋上駅を中心に中規模の広場が集まって、大きな立体広場ができあがるイメージです。また立体広場は、広場を囲む市街地建物と連携し、イベント利用や日常的な交流を促すための冗長性の高い余白空間として、周辺との関係性を構築します。
・この立体広場は、東西に広がる市街地に囲まれたヴォイドであり、緩やかな谷地形の立地特性をそのまま活かすものです。中高木より地被類や低木で地表面の多くを緑化し、視線が抜け、開放感のある広場とします(cf.水戸の千波湖)。JR所有地内の廃線部分の緑化も交渉します。駅を中心に人や生物も集まり、日立の山と海の間にある常陸多賀駅が、地域生態系の保全に貢献します。併せて、駅周辺の民有地緑化を促進する手法をデザインガイドラインへ組み込み緑化を誘導します。

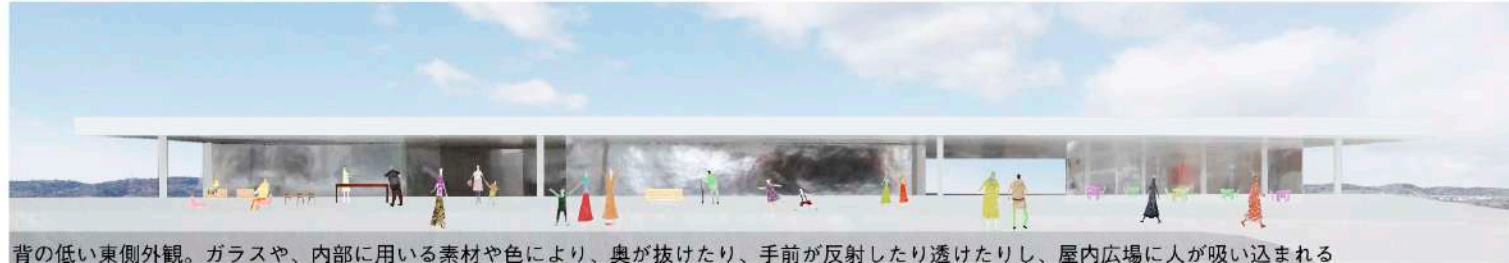
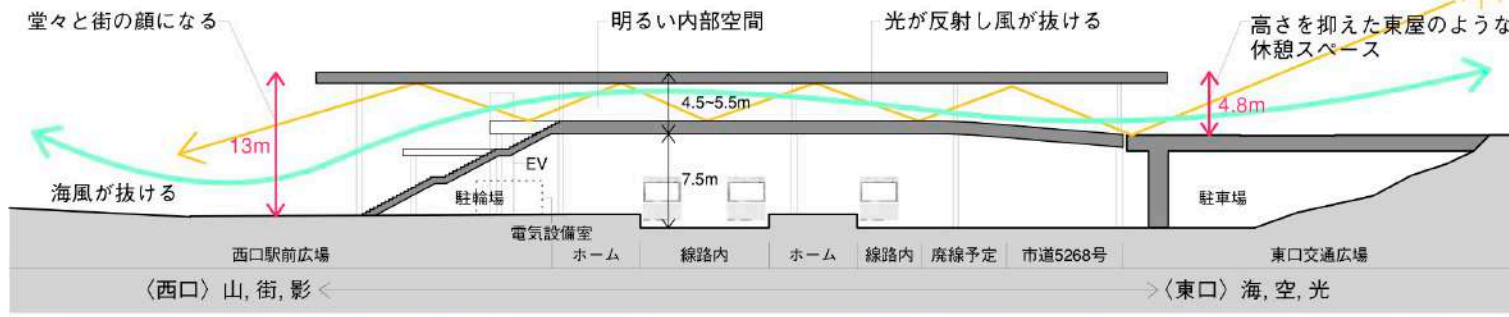
3.駅をまちの大きな顔にする(IIウ)

・西口市施設とともに、駅の諸機能を集約した幅広の橋上駅と、その周りの空地の存在により、駅の存在感が引き立ちます。駅を内包した公共空間の新しい姿をはっきりと現し、駅から生まれ変わる街の新しい顔になります。同時に、車依存を緩和し歩いて楽しむことのできる、駅から始まる環境にやさしい街づくりを示唆するものです。隣の日立駅では「駅(内部)から海(外部環境)を見る」ことが主題の一つでしたが、小さな常陸多賀駅ではここに「まち(外部環境)から見られるための駅」の視点を加え、市民の関心を集めます。
・環境の違う西口と東口にはそれぞれ異なる顔を持たせます。住宅の多い東口では軒高を抑え、気軽に立ち寄りやすい、間口の広い縁側エントランスをつくり、多くの人を迎えます。階段広場が橋上の屋内広場へ誘います。また、駅が空中へ持ち上がることで、電車を駅施設で隠さず見せます。電車と街を近づけるだけでなく、電車で訪れる人の姿を想像できる駅前風景を保ちます。

■駅一体を立体広場にする(IIイ)



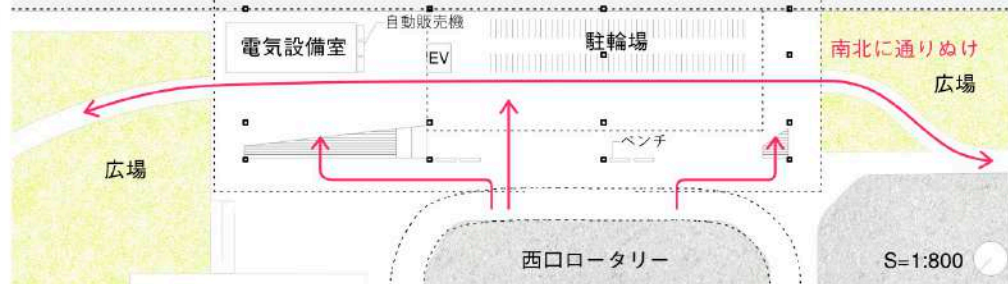
■東西のつながり(断面イメージ図)



■平面イメージ図(駅舎階)



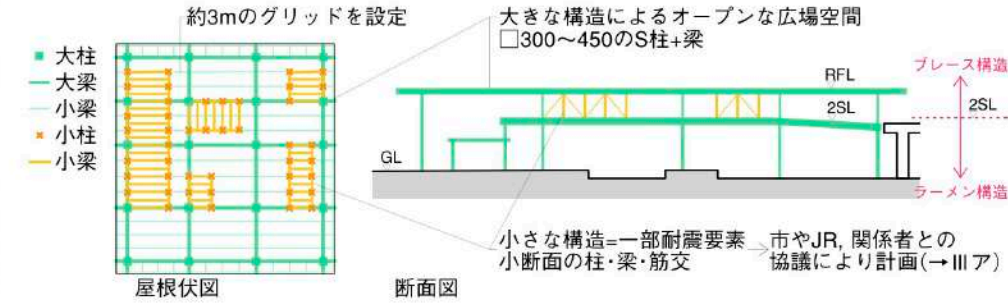
■平面イメージ図(ホーム階)



■南北断面イメージ図

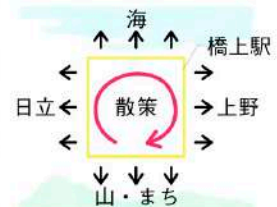


■フレキシブルな構造計画

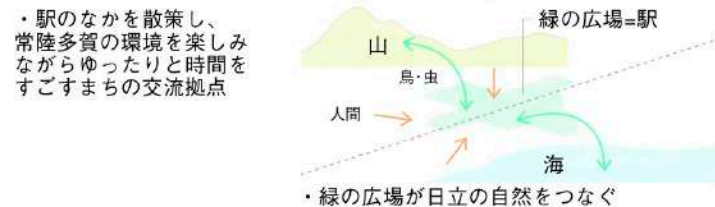


・「大きな構造」に、「小さな構造」をプランニングに合わせてフレキシブルに組み込み、全体として安定した耐震性の高い構造体となる

■環境とともにある駅(IIウ)



■地域生態系の保全に貢献(IIイ)



1.市民の姿を想像できるまちへ(Ⅲア+イ)

・市街地の建物には閉鎖的な佇まいが多く、市民の生気を内側へ仕舞い込んでいるきらいがあります。ここでは、一人ひとりの姿を想像しやすい活気ある都市風景を目指します。
 ・まず橋上駅には、活動の新たなプラットフォームとして市民が求める多様なプログラムを可能にする小さな空間や造作を加え、市施設、JR、民間店舗との連携を図れるよう、フレキシブルな平面計画(構造計画を含む)とします。橋上駅の外壁はガラス面として、人の動きが可視化させ、市民の姿を公開します。電車の車内から駅を見上げると、駅に佇む人の気配が映り込み、常陸多賀駅で下車しない乗客からも、活気が窺えるようにします。

・駅周辺の線路脇の空地に面する既存建物群は、これまでと道路に正面を向け、線路側には背を向けていました。ここでは、整備地区全体を大きな広場と捉え直しているため、これらの建物が逆を向いて新しい広場を囲むように再生や転用をし(→イ)、駅と市街地との関係性を構築し、駅周辺をより広場らしくしていきます。今回の計画が市街地の建物へ働きかけ、街を少しずつ再生できるよう誘導指針をつくりたい。

2.少ない費用と手間でまちを更新(Ⅲイ)

・街の再生にあたっては、既存建物の構造体を活かし、改修や転用を積極的に行うことにより、少ない手間と費用で街を変えることは可能と考えます。空き家の活用や、小規模な改修・増築を伴い、駅側に背を向けている建物をあたらしい広場側へ振り向かせるようにします。広場側にファサードをつくり、1Fに大きな開口部を設け、軒を張り出すなど、これらの改修や用途転用時の手法をガイドラインで誘導し、土地所有者にも働きかけます。まずは、駅に背を向けた駅周辺建物群をエリアⅠと定め重点化します。そこから市街地へ少しずつ広げ、エリアⅡ、Ⅲと、駅を中心に歩いて楽しめる豊かなまちづくりを構想します。このことは、建設行為における環境負荷を低減し、健全な物質循環やエネルギー循環に貢献します。

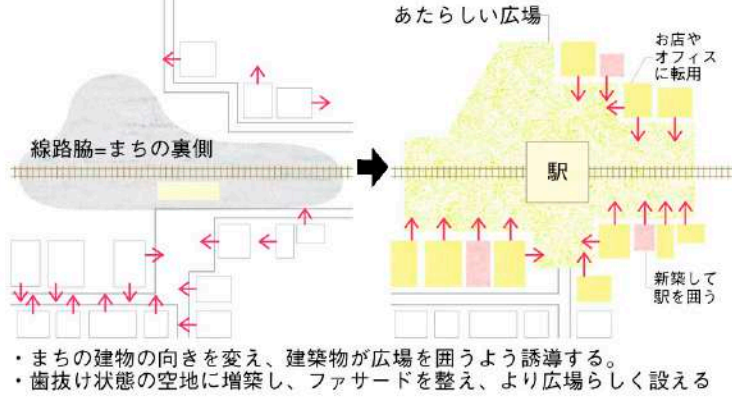
・転用後の具体的な用途は、若い世代による店やオフィスの開設、公益活動拠点、飲食店やクリニックなど生活拠点です。一体的な街の価値を創出できるよう、外観や色彩、サイン計画などについて、具体的なガイドラインを制定します。課題別にメニューブック等を作成し、市民や市職員が運用しやすい手順や選定方法を明記します。指針には市民や利用者に伝わりやすい視覚表現を用います。

3.市民参加は広場のはじまり(Ⅲア)

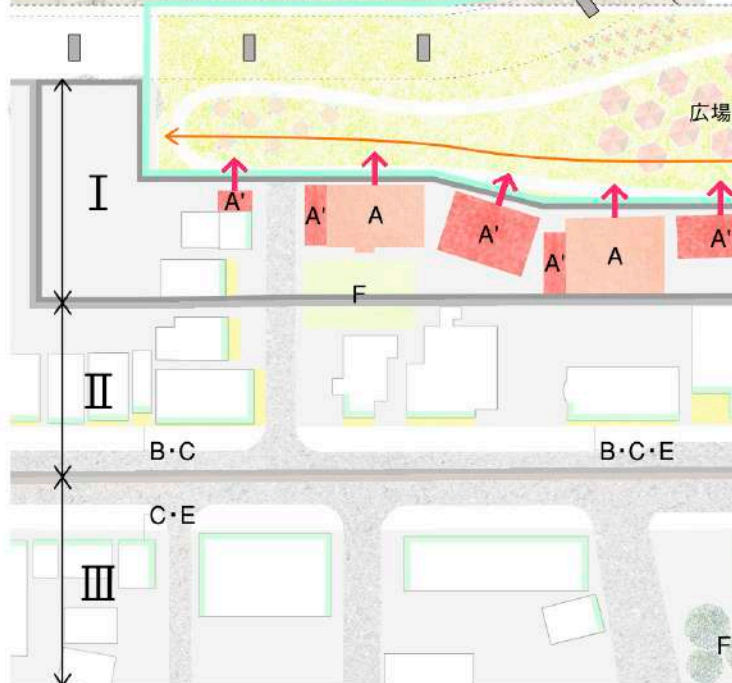
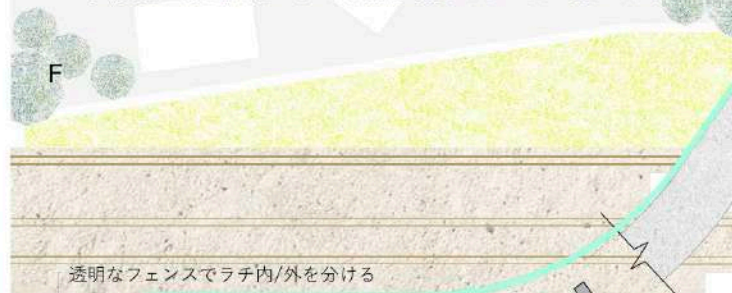
・ワークショップにおいて新しい世代の街づくりへ向けた協働者と出会い、関係性を築き、よりよく実行していくことは大きな目的となります。コロナ社会を逆手に取り、市民意見を集める場の範囲を、ネット社会上の多様な媒体を用い拡充し、非対面での参加者を募りつつも、駅をつくるプロセスでも「顔を合わせる」対面形式を重視します。

・できる限り広い会場(多賀市民会館等)の協力を得たオープンハウス形式を採用し、大きな完成イメージ模型やパネル展示を用いて、市民、駅利用者等の意見を聴取し、計画へ反映します。会場では人の流れを一方通行とし、入口で体調確認と感染予防を徹底します。また出口ではアンケートへの回答ブース、十分に間隔を設けたヒアリングスペースを設け、来訪者からの意見をいただきます。結果は市報、市役所ホームページや町会掲示板などで広く周知を図ることで地域住民間の情報取得の格差を少なくし、事業への参加意識を高めます。

■駅を囲うまちづくり

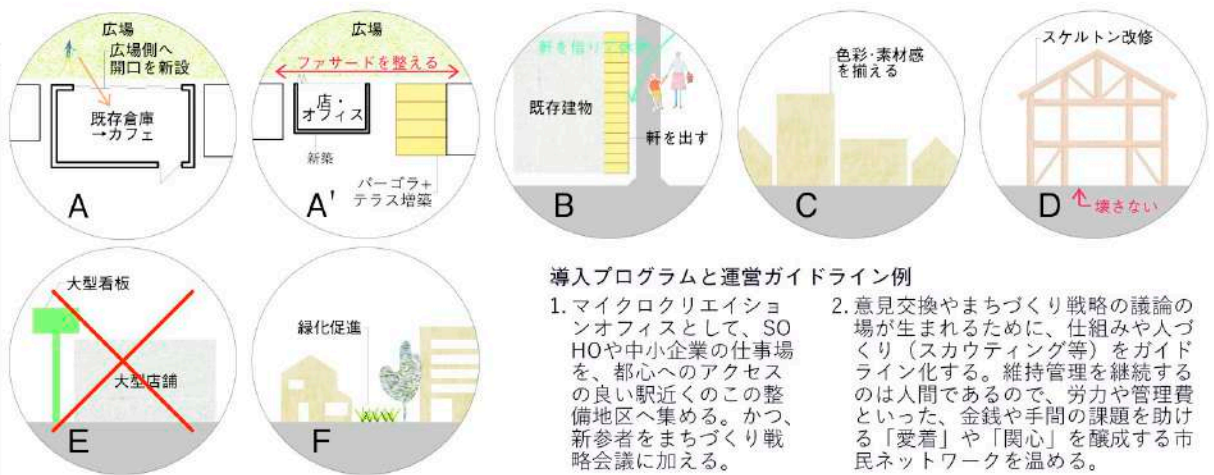


・まちの建物の向きを変え、建築物が広場を囲うよう誘導する。
 ・歯抜け状態の空地に増築し、ファサードを整え、より広場らしく設える



■歩いて楽しむまち構想のガイドライン具体例

- 細やかな建築の再編によるまちづくり(例)
- A.【改修】1階の開口部は大きくし、建物内部の活動が外からも見え、生気に満ちた街の景観をつくる
 - A'【増築】広場周辺の低未利用地には建物が広場を囲むよう新築、増築を誘導する
 - B.各建物は、道や園路側に軒を出す等小さな滞留場所をつくり、ベンチを置いて気軽に休憩できるようにする
 - C.色彩や素材感を統一し、多様な活動の現れが美しく映えるようにまとめていく
 - D.空家を活用。築年数が古くとも、強く質の高い建物は保存し、改築せず改修することを支える
 - E.改築・新築時は、最大敷地面積や道路開口を制限し容積や道路後退を制限するガイドラインを厳しく設定し大型集合住宅や商業施設建設のような、デザイン指針に対し不心得な建設行為を徹底的に排除する
 - F.駐車場の緑化舗装や庭への植栽など民間地の緑化を誘導し緑を面的に広げる



導入プログラムと運営ガイドライン例

1. マイクロクリエイションオフィスとして、SOHOや中小企業の仕事場を、都心へのアクセスの良い駅近くのこの整備地区へ集める。かつ、新参者をまちづくり戦略会議に加える。
2. 意見交換やまちづくり戦略の議論の場が生まれるために、仕組みや人づくり(スカウティング等)をガイドライン化する。維持管理を継続するのは人間であるので、労力や管理費といった、金銭や手間の課題を助ける「愛着」や「関心」を醸成する市民ネットワークを温める。



■オープンハウスと個別ヒアリング

- オープンハウスは3回を予定し、毎回主題を設定します
- 1回目=まずは参加を促す。駅周辺に「あると良いもの」事業内容、年次工程などを公表し、市民や駅利用者の要望抽出、整理。駅舎及び駅周辺広場などの規模感や整備水準の設定に有益な情報を得る。
 - 2回目=目的を一つにする。今後につなげる「もの・ひと・こと」設計概要の中間報告。計画中のプログラム、空間のあり方について公表し、使う人や使い方をなるべく具体的に把握する。供用後にギャップを招かないためにも利用者のニーズを的確に整理する。
 - 3回目=参加意識を持続する。駅周辺整備は「できてからがスタート」最終段階での結果報告。いただいた意見は、反映できた内容(採用)、使いながら調整する内容(課題)、長期的課題(参考)として整理し、次のステップの持続可能なまちづくりにスタートであることを周知する。

+

監督員との協議、承認を経て、個別ヒアリングを実施します。駅周辺における歩行者動線において、点状ブロックの配置模型を作成し実際に触れていただきながら視覚障がい者団体の要望を聞く、隣接する工場との連携案を作成し、駅周辺の活性化推進における官民連携のあり方について意見交換を行うなどを考えています。